

# 自己理解を促す図画工作ワークショップの題材開発研究

鈴木 海来

(学籍番号: 21PE1107, 指導教員: 手塚千尋)

## 背景と目的

本研究は、図画工作(以下、図工)の教科の特徴を生かした造形ワークショップが、自己理解を促すことにどのように貢献できるかを明らかにすることを目的とする。

本研究の背景は、自身の経験と社会的背景、日本教育とウェルビーイングについてが背景である。生きづらさを感じる世の中、自己理解をし、自分を受け入れることは自分らしく生きるために重要であると考える。また、文部科学省では、「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が基本方針の一つに掲げられ、教育を通じて向上させていくことが目指されている。

## 方法

図工の特徴を活かした活動を企画デザインし、展覧会会場で実施する。「自己紹介」をテーマとした制作に取り組む過程で、参加者にどのような自己理解、が生じたかを記録し、活動後の参加者によるふりかえりと、筆者との対話によるふりかえりを行い、参加者の各活動の中でどのような自己理解が起きたのかを記述していく。同意を得られた参加者のワークシート、対話の記録、作品写真を分析対象とする。

### ワークショップ概要

ワークショップ概要は以下の通りである。

日時: 2024年11月25日(月)から2024年12月1日(日)

場所: デザインフェスタギャラリー原宿 EAST  
204

グループ展「せいかつが、いろどりを、にちじょうが」展内

対象: 小学校低学年から成人

ワークショップ企画名: 「自己紹介グッズを作って、自分を再発見しよう!」

### ワークショップデザイン

今回のワークショップでは自己理解を先行研究にて田中(2017)が言っていた、「内的自己受容」及び「自己洞察」と定義する。

図工とは学習者自身が素材に関わって感じたことや、自分自身の直感や好み、考え、思いから出てきた表現を大切にできる教科である。それらを経て、ワークショップでは「内的自己受容」や「自己洞察」

による自己理解を促すことができるテーマとして「自己紹介」を選択した。

### ワークショップの進め方

Table 1 ワークショップの進め方

内容	備考
① ご挨拶・参加者に説明を行う・導入	a 素材を見る、触れる
② 制作・ワークシート記入	b 好きな素材を選ぶ c 自由に組み合わせて自己紹介グッズを作っていく d ワークシートに素材を選んだ理由や、作品の説明、意味づけをする
③ 作品説明(自己紹介)・対話	
④ まとめ・感想	
⑤ 謝辞	

上記の進め方でワークショップを行った。「自己紹介グッズを作って自分を再発見しよう」というテーマのもと、自由に制作ができ、素材をたくさん選べる空間の提供をする。

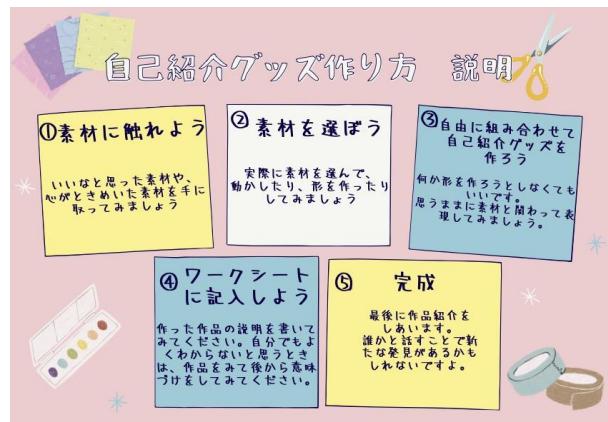


Figure1 自己紹介グッズ作り方説明

### ワークショップの実施

#### 結果

今回のワークショップでは45名が参加した。参加した人には作品を作った上でワークシートを記入してもらい、その後に参加者同士あるいは自分と対話を行なった。対話を行ったのは32名、行っていないのが13名である。以下の図はワークショップ中の様子(Figure2)及び素材選びの空間(Figure3)である。



Figure2



Figure3

## 分析と考察

ワークシートの記述を分析し、「内的自己受容」と「自己洞察」に該当する要素の抽出を試みた。ワークシートの感想の項目に記述してあったことは8つに分類できた。今回は、自身の経験や嗜好について・自身の変化や気づき、性格について・自身の今後について言及・他者理解から自分について言及の項目を「自己理解」と同定し、・他者理解についての言及のみを「他者理解」と同定した。結果は、自己理解が半数以上となっていた。また、対話をを行っている人と行っていない人の感想には違いが表れた。以下の図3に対話の有無と感想の関係について表している。対話ありでは、自己理解及び他者理解の項目が多くなっているのに對し、対話を行わなかつた人は、その他・無記述が一番多く。その次に楽しい・面白いという結果であった。

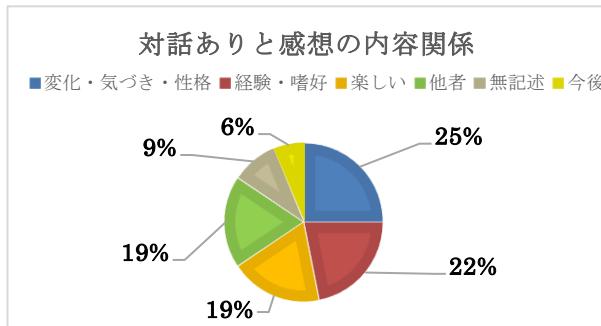


Figure 4 対話ありと感想の内容関係

この結果からは、造形後の対話が参加者のふり返りを促し、自己理解及び他者理解がより一層進んでいることが考察できる。このことから、互いの作品を見て、話をして、話を聞くことが、自己理解及び他者理解を促進したと言える。

### ワークショップでの経験

ワークショップを受けた45名の制作過程とその後の語りを分析したところ、経験の過程を30パターンに分類することができ、それを図式化したのがFigure 5である。

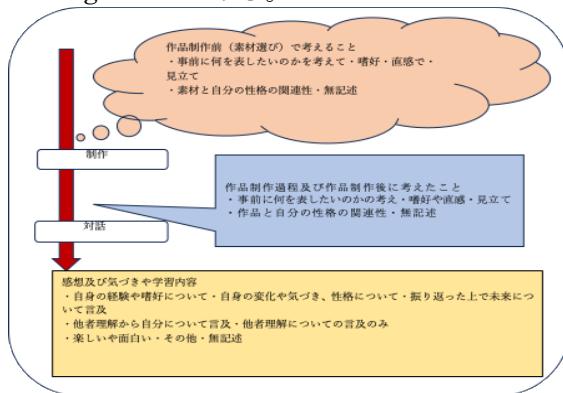


Figure 5 ワークショップでの経験過程

この結果から、同じプログラムを提供しても、参加者の経験は一律ではないということが言える。それが、図工をはじめとした美術教育やアートの基本的な性格であり、本質であると言える。本ワークショップにおいて、こういった多様さを保証できたことは、本企画の図画工作科としての題材の妥当性を示していると判断できる。

## まとめ

本研究では、図工の教科の特徴を生かした造形ワークショップが、「自己理解」を促すことにどのように貢献できるかを明らかにすることを目的とした。本研究では、田中(2017)に基づき、「自己理解」を「内的自己受容」と「自己洞察」と定義し、それらが促すテーマを「自己紹介」と仮定してワークショップを開発した。本ワークショップでは、個人の多様性を認め、自己肯定感や自己理解を促進する有効な教育実践であることが確認された。語り、ふりかえることによって色・形など「もの」に込められた、自身の考え方などの「こと」をより効果的に表出できるといえる。自己理解だけではなく、他者理解を内包する本実践は、教育によるウェルビーイング達成に貢献することができると考える。

## 主要引用文献

- ・茂木 一司(2014)「協同と表現のワークショップ：学びのための環境のデザイン」
- ・文部科学省(2018)「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 図画工作編」
- ・文部科学省(2023)「教育振興基本計画」
- ・内閣府(2021)「Well-being に関する取りまとめ作業方針」
- ・田中 壮馬(2017)「アート表現による自己への気付き」『中京大学 心理学研究科・心理学部紀要 第16巻 第2号』p.19-p.26
- ・内野務(2016)「造形素材に詳しい本」『日本文教出版株式会社』
- ・山内 祐平 (2013)「ワークショップデザイン論」

## 付記

本研究は著者による2024年度教育発達学科卒業論文「自己理解を促す図画工作ワークショップの題材開発研究」における研究の一部として行われた。